

特殊学級担任が行った特別支援教育コーディネーターの活動

札幌市立澄川小学校

前 田 利 久

キーワード：特別支援教育コーディネーター、特殊学級担任、支援体制、校内委員会、校内での支援

札幌市では、平成15年3月に「札幌市特別支援教育基本計画」を策定した。同年10月には幼稚園と小・中学校に、校内委員会としての校内学びの支援委員会（以下 学びの支援委員会）の設置と特別支援教育コーディネーター（以下 コーディネーター）の指名を行うことの通知を出し、特別支援教育を推進している。

澄川小学校（以下 本校）でも、学びの支援委員会が設置され、私がコーディネーターとなって2年以上が経過した。私は情緒障がいの特級学級の担任を務めながら、コーディネーターの活動を行っている。校内の校務分掌や特別委員会の業務、札幌市や研究団体の役割などもあり十分な活動ができているとは言いがたい。それでも、何とかこの程度のことには取り組めると例を紹介したいと考えた。

特殊学級担任は、特別支援教育と関わるためにできるだけコーディネーターになるのがよいと考えている。しかし、コーディネーターとして活動している特殊学級担任は、意外と少ないように思っている。もちろん、コーディネーターでなくても特殊学級担任のノウハウを、特別な教育的な支援を必要としている子供の指導・支援に生かすことは可能である。

本稿では、特殊学級担任として特別支援教育に関わるという視点から、主にコーディネーターの役割としての「校内における支援体制の構築」と、コーディネーター及び特殊学級担任の役割としての「校内における支援の実践」の二つの項目で活動をまとめたうえで、成果と課題を整理してみたい。

1. 校内における支援体制の構築

（1）校内委員会の設置と運営

本校の学びの支援委員会は、就学適正委員会（就学指導委員会）を発展させて設置した。運営計画には、資料1の「1ねらい、2活動内容、3構成員、4主な窓口」のほかに「5活動の流れ（校内支援 地域学習支援 学習支援・生徒指導）、6年度の活動計画」を明記している。職員会議で運営計画を提案して協議したり、学校運営誌に掲載したりすることで校内での理解が深まり、取り組みの体制作りが行えると考えている。本年度は、学期ごとの活動内容の報告を行ったり、年度末の反省を予定したりしている。

資料1. 「学びの支援委員会」運営計画（一部抜粋）

平成17年度 澄川小学校学びの支援委員会運営計画

1 ねらい

運用については、札幌指1227号「札幌市立幼稚園・学校における特別支援教育の推進について（通知）」による
特に、本校では主に以下の4つの内容について問題の解決を図ろうとする。

- 校内における特別な教育的支援を必要とする子どもの学びを支援する。【特別支援教育～校内支援】
ア ADHD（注意欠陥多動性障害）・LD（学習障害）・高機能自閉症などの軽度発達障がいや、弱視・難聴・知的障がい・肢体不自由などの軽度の障がいのある子どもに対する支援
イ 学年・学級を基盤とした支援体制を組むことにより、特殊学級（ひまわり学級）の子どもを全職員で支援する。
- 盲・聾・養護学校などで学ぶ子どもの地域学習を支援する。【特別支援教育～地域学習支援】
- 学業不振、不登校、いじめ、その他、家庭環境などを原因とする子供の自己実現の阻害となる問題に対して解決を図る。【学習支援・生徒指導】
- 適切な就学・進学、学習の内容・方法などについての相談とその対応を支援する。【就学・教育相談】

2 活動内容

- 校内の教職員及び保護者や関係機関などとの連絡調整を行う。
- 教育的支援のあり方や適切な指導のあり方を検討する。
- 特別支援教育や不登校などにかかわる校内研修を実施する。

3 構成員

校長 教頭 A教諭 前田 B教諭（1年） C教諭（2年） D教諭（3年）
E教諭（4年） F教諭（5年） G教諭（6年）
【特別支援教育コーディネーター：前田】
その他業務を行うために必要な教職員

4 主な窓口

- 校内支援・・・前田
- 地域学習支援・・・A教諭 前田
- 学習支援・生徒指導・・・A教諭
- 就学・教育相談・・・前田 A教諭

* 地域学習とは、盲・聾・養護学校で学んでいる子供が、居住している地域（校区）の小・中学校で学習活動を行うことで、札幌市教育委員会からの連絡通知に基づき実施されている。

(2) コーディネーターの役割

コーディネーターの役割は、大きくは次の4点である。

- ア. 資料2の「校内支援の手順」の中での役割
- イ. 地域学習支援の手順の中での役割
- ウ. 就学・教育相談の実施と関係学校や機関との連絡調整
- エ. 特別支援教育に関する校内研修の企画と実施

具体的な役割としては、校内の関係者や関係機関との連絡調整、保護者に対する相談窓口、担任への支援、学びの支援委員会での推進役、特別支援教育に関する理解・啓発の推進などがある。

2. 校内における支援の実際

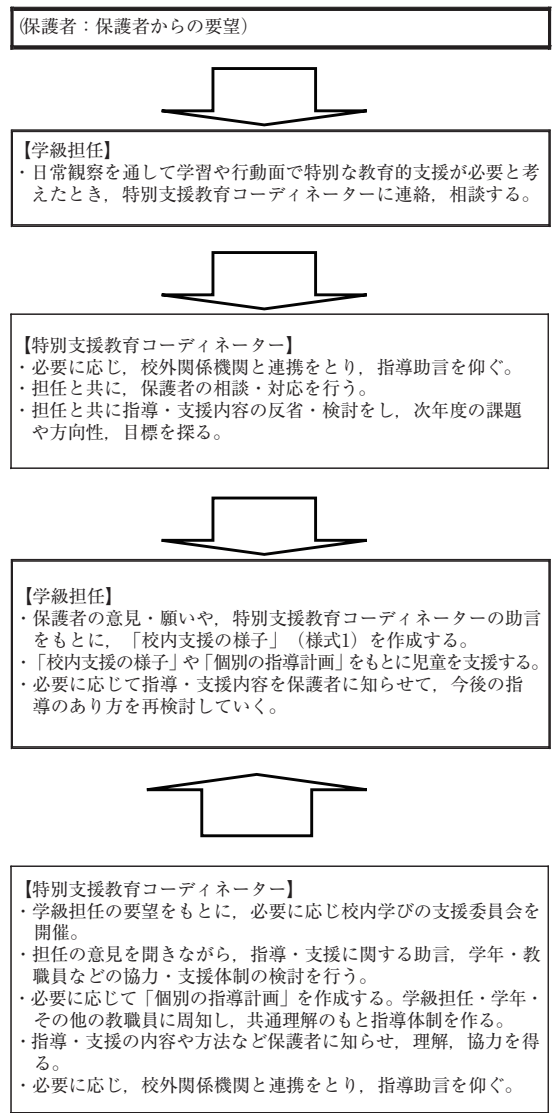
(1) 児童理解交流

校内での気になる子供の（特別な教育的支援や学習支援・生徒指導を必要とする子供）の様子、指導・支援の方針・内容などを知ったり、意見交換したりするために、年に3回児童理解交流を実施している。その際には、通常の学級担任が資料3「校内支援の様子」を作成し、使用している。

P-D-Sのサイクルでの取り組みを意識して、6月には実態や指導・支援の方針・内容など、10月には前期のまとめと後期の方針・内容、3月には後期のまとめと次年度への引継ぎ事項の共通理解を図っている。

対象の子供の困難さの原因を障がいと環境に分けて考えられるように、用紙を2種類用意したり、障がいに関する資料を提示したりしている。平成17年度は、障がいがある又はあるのではない

資料2. 校内支援の手順



資料3. 校内支援の様子

校内支援の様子		
澄川小学校学びの支援委員会		
児童の氏名	性別	生年月日
	男 女	年 月 日生
家庭環境	家族構成 保護者のかかわり 生育歴 生活習慣の様子など	
関係機関	関係機関名 相談月日・回数・内容など ○月上旬静養院にて検査、○月末に結果が出る。区役所の福祉課で相談済み。 札幌市教育センターで相談の予約をとっているところ。	
児童の実態	学習の様子（聞く・話す・読む・書く 計算する 道具の操作 運動の様子など） 読むことのできる平仮名は20字程度。13位まで数えることはできるが、量としての把握はできていない。決まった動き（花笠音頭など）は、まわりの子を見ながら身体を動かしている感じ。 生活の様子（友達とのかかわり 行動の様子 集団への参加状況など） 集団行動は普通にとることができる。 友達とも遊ぶことができる。たいたたり、悪態をついたりすることがある。	
保護者	希望 要望 願いなど	
指導・支援	担任・学年内 国語、算数は、別課題で学習を進めている。 他の職員の協力 T・Tの時間には、マンツーマンで算数の指導を行っている。	
第2回交流	前期の児童の様子 2学期より、週数時間、国語と算数を特殊学級で指導している。平仮名の読み、数の把握など、少し進歩が見られる。 後期の方針 現在の取り組みを継続しながら、○学年以降の方針も検討していく。	
第3回交流	後期の児童の様子 前期に引き続き、T・T、特殊学級での学習も交えながら進めてきた。少しずつではあるが、伸びが見られる。本人は、意欲的に物事に取り組むことができた。 次年度への引継ぎ事項 転居予定。札幌市教育センターで相談後、転校先を決めることになっている。	

かと考えられた子供11名、環境によると考えられた子供4名の様子を交流している。交流をしながら、子供の変容、指導・支援のポイント、協力体制などについての話をしている。児童理解交流を行うことで、対象の子供を明確にして指導・支援の計画作りが行えたり、子供の理解や指導・支援の内容や方法に関する研修の場を確保したりできていると考えている。

(2) 教育相談

本人・保護者・通常の学級担任などとの教育相談で、今後の指導・支援の方針や内容などの確認をすることがある。相談を行うことで、保護者の悩みや不安を解消したり、思いや願いなどをより一層知ったりすることができる。また、学校での取り組みの共通理解を図れるとともに、家庭での関わり方の助言も行える。保護者、特に母親が孤立しない、自信を失わないためのサポートは大変重要である。保護者が明るく元気に子供へ対応できるようにすることは、特別支援教育では欠かせない要素の一つと考えている。

平成16年度は3ケース8回、平成17年度は12月までに5ケース7回実施している。なお、相談にあたっては、保護者に了承していただいたうえで、記録を残している。

(3) 通常の学級担任への助言など

担任からの相談を受けて、さまざまな教育活動の場で、実際にどのような指導・支援を行えばよいのかを助言することも多い。助言を行うためには、資料4のように簡単でわかりやすい説明の仕方を考えるように心掛けている。

関係機関とつながりを持つことで、担任へ助言をしていただいたり、教材を提供していただいたりすることもある。医者からの助言をもとにかかわり方を工夫して多動を改善できた広汎性発達障がいの子供、札幌市教育センターでの知能検査や相談で不安なく通級による指導を開始することができた言語障がいの子供、通級による指導の先生からの情報や教材の提供で学習への取り組みやすさが増した弱視の子供の例などがある。

(4) 子供への指導・支援

平成16年度の1ケースは、学習の困難さについての担任の気づきと保護者からの申し出が一致し、T・Tと特殊学級での学習も含めた対応を行った。対応は、資料5の手順で行った。指導・支援に関係する資料としては、担任が資料3「校内支援の様子」を、コーディネーター（特殊学級担任）が資料6「学習の記録」を作成した。

3. 成果と課題

(1) 成果

資料4. 説明資料の例

ADHDとは？

(注意欠陥多動性障がい)

- 忘れ物が多い、最後まで聞くことが苦手で時にうわの空になる、最後まで課題に取り組まない
- 質問中に答える、順番が待てずいらしたり大声をあげる、人のじゃまをする、ルールに従えない
- 教室から出て行く、着席できない、そわそわもじもじしている、過度にしゃべる、廊下を大声をあげながら走りあちこちに衝突してしまう

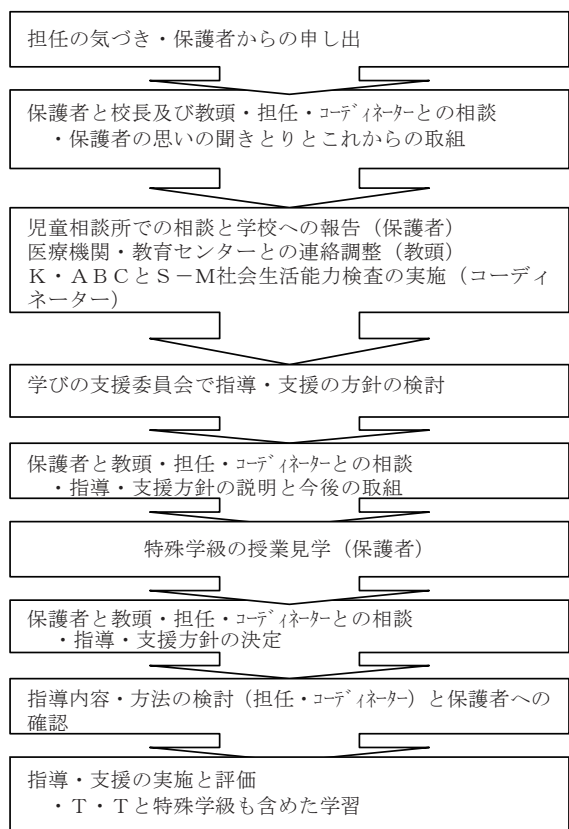
ADHDの子供の見方

- 様子の背景
 - 年齢、発達に不釣り合いな**注意力、衝動性、多動性**
- その原因
 - 脳の器質的要因、遺伝、資質などの生物学的要因を土台に、環境要因が絡み、状況や年齢により状態像が変遷
 - 注意の維持ができないため、「報酬期待」が持てなかったり、他者を参考にしながら社会性を学習する機会が少なかったりしている

ADHDの子供への対応

- 基本症状の完璧なコントロールをめざさず、子供個々の自己評価をおとしめないようにする
- 良いところを見つけて、褒めていく
- 周囲との関係、問題の原因を考えて、振り返りや落ち着く反省をする
- そわそわすることも時には認める。じっとさせることにエネルギーを使うのではなく、役割を与えるなどして適切な行動ができるようにする
- **愛は子供を救う**

資料5. 対応の実際



資料6. 学習の様子

学 習 の 記 録 (平成16年度後期)			
児童名 (学年)		(年)	
記入年月日 2005年 3月16日		記入者 前田 利久 (ひまわり学級)	
9月の学習の様子	<国語> ・ 平仮名がほとんど読めない。 ・ 平仮名を写して書くようになってきている。 ・ 語りが少なく、経験したことを話すことが難しい。 <算数> ・ 1から10まで写し書いたり、読んだりできる。 ・ 10まで数えるようになってきている。 <その他> ・ 座り方や話を聞く態度があまり育まれていない。 ・ 鉛筆を正しく持つことが難しい。		
	学習のめあて		学習の様子
	<国語> ・ 絵カードを見て名前を言う。 ・ 平仮名を読んだり書いたりする。		・ うどん、犬などの名前を言ったり、平仮名のカードを合わせたように読んだりするようになってきた。 ・ 好きな食べ物の名前を書いて読むようになってきている。
	<算数> ・ 30まで書いたり、読んだりできる。 ・ 20まで数える。		・ 順番に数を唱えながら書いたり、写して書いたりする。 ・ 磁石や棒を数える。
	<その他> ・ 座り方や鉛筆の持ち方に気をつける。		・ 20までは書いたり、読んだりするようになってきた。 ・ 19まで棒を数えるようになってきた。
まとめ	・ 正しい時には言葉掛けをする。		
	・ 言葉掛けに応じて座り直したり、持ち直したりしている。		
学習意欲が高まり、クイズ形式で問題を出すと非常に意欲的に学習に取り組むようになりました。「やりたい」「やってみよう」気持ちを大切にしていきたいです。約束をして、話し方を教えて練習することで、教室へ入ってくる時と出て行くときのあいさつができるようになりました。あいさつやお願いする時の話し方なども一層身に付けて欲しいです。			

校内では、以下の点が考えられた。

- ・ 困難を持つ子供を学級担任だけでなくより多くの人で支えられるようになってきた。
- ・ 困難さが増して対応が難しくなる前に、指導・支援を開始できるケースがあった。
- ・ 校内だけで解決しようとしなくて、関係機関との連携を考えるようになってきた。

（2）課題

校内では、以下の点が考えられた。

- ・ 落ち着きのない子供への対応では、障がいの有無を慎重に見極める必要がある。
- ・ 中学校への進学時の引継ぎをどのように行っていくかの検討が必要である。
- ・ 保護者が一層安心して相談できる、様々な誤解を解消できるようにするために、保護者への啓発を十分に行う必要がある。
- ・ コーディネーターが交代する際の引継ぎをスムーズに行うための工夫が必要となる。

その他、校内だけでは解決できなかったり、様々なコーディネーターの立場を考えたりすると以下の点も課題と考える。

- ・ 子供や保護者のニーズに応じて選択できるように、通級による指導の充実や特殊学級の運用などで学びの場を多様化する。
- ・ 各校のコーディネーターがかかわることができる場の設定や工夫をして、コーディネーター間での情報交換や互いに支えあう体制作りをする。
- ・ 特別支援教育に関わっている人の関心、意欲、知識、実践力などの差が大きくなってきている。「実際に関わっている」「積極的に関わりたい」「不満がある」「わからない」などの関わる側のニーズに応じた研修機会を設定する。